

現代にひびく右近の靈性



日本カトリック司教協議会
列聖列福特別委員会 編

現代にひびく右近の霊性

この小冊子は、列聖列福特別委員会が、高山右近の生涯から、現代に生きる教会へのメッセージを読み取り、できるかぎり分かりやすく簡潔にまとめたものです。そのため右近の生涯に関する記述は最小限にとどめました。メッセージの裏付けとなる出来事や右近のことば、また右近の生涯そのものについては、近く一冊の本にまとめてご紹介するため、準備を進めています。

まえがき

「流罪に処せられる間に死ぬ、または牢屋の難儀を耐え抜いて死ぬ。そのほか、いずれの場所にあっても辛勞難儀の道により死ぬことはマルチリヨ（殉教）である」（『マルチリヨの心得』）

聖人・福者を記念することの意義は、その遺徳を^{たた}称えるというより、神がその人びとを通して行われた救いのみわざを思い起こすところにあります。聖人・福者を通して示される神の救いのみわざを思い起こすたびに、キリストに従って御父に到る道とは何かを、いっそうよく知ることができるようになるからです。

開国直前、信教の自由がない江戸時代末期に列聖された日本 26 聖人殉教者と 205 福者殉教者、ヨハネ・パウロ二世によって列聖された聖トマス西と 15 殉教者、さらに、2008 年に長崎で列福された福者ペトロ岐部司祭と 187 殉教者は、神が日本の教会になさった救いのみわざを私たちに^{あか}証ししています。

そして私たちは今、すでに列聖・列福された人々に加え、きわめて特徴的な生き方を通して神の救いを証しした一人の人物に注目しています。ユスト高山右近（以下 右近 1552 - 1615）です。

「マルチル」とはキリストを証しした人のことを指し、初代教会当時から、信仰のために流罪に遭い、そこで生命を終えた人をも、教会は殉教者と見なしていました。日本の教会も早くから、流罪に遭ってその地で生命を終えた人は殉教者であると教えていました。

幾たびもの追放に耐え、マニラ追放直後その生涯を終えた高山右近を、当時の教会が殉教者として申請した通り（1630年）、現在の日本の教会は、彼を殉教者として教皇庁列聖省に申請しています。

ユスト高山右近は、織田信長・豊臣秀吉に仕えた代表的な戦国大名として広く知られています。激動する時代の波に翻弄ほんろうされ続けたかにみえるその生涯、しかし、右近自身は、確固とした信仰者へと成長し、それを生き抜いた人であると言えます。右近を通して神が日本の教会になさった偉大なわざに思いを致すとき、私たち自身の生き方に、そして現代の教会の行く手に、光明を見いだすことができるでしょう。

八つのメッセージには、それぞれ、関連するコラム・写真を付けました。
メモ欄は、個人での黙想、共同体での分かち合いなどにお使いください。

目 次

まえがき	3
1 高山右近は幾多の試練を生き抜いた殉教者である	6
2 右近の信仰は時とともに成熟した	8
3 右近は教会の良心であった	10
4 右近は日本文化を大切にし、 キリスト教をいかに日本の土壌で開花させるかに努めた	12
5 右近は「ごたいせつ」の心を実践した	14
6 右近の霊性の特徴は「誠実と賢明」である	16
7 右近が行く先々に教会共同体が生まれた	18
8 右近は家庭の絆を信仰に置いた	20
あとがき	22
ユスト高山右近の列福を求める祈り	23

1 高山右近は幾多の試練を生き抜いた殉教者である

右近の生涯は試練の連続であり、追放に追放を余儀なくされたものでした。地位も名誉も、国も栄達も失う中で、右近が選び続けた道は、キリストの福音に従う生き方でした。秀吉の伴天連^{ばてれん}追放令（1587年）で領国であった明石六万石を失い、小豆島や肥後などに隠れ住む日々が続きます。1588年に、ようやく加賀金沢の前田利家に客将として迎えられました。金沢での26年もの長い年月、教会と社会に奉仕する模範的な日々を送りました。しかし、最後には、徳川家康の禁教令（1614年）によるマニラへの追放を甘んじて受けたのです。右近はマニラに流罪になった当初から、殉教者として尊崇されていました。1587年秀吉によって追放された際に、時の教皇シクスト五世は彼を殉教者として扱い、称賛の手紙を送っています。追放され流浪の生活が続く中であっても、右近は揺らぐことのない確固とした信仰を生き抜きました。

現代は相対的価値観に支配され、信念を貫いて生きることが困難な時代です。右近はこのような現代の人々に、気骨ある生き方を示してくれます。人生にかかわる重大な選択を迫られた時、彼は福音を何より大切にする生き方を、身をもって証ししたのです。いかなる困難にあっても福音に従って生きる、これこそ現代の殉教です。日々の葛藤^{かっとう}の中で神の愛に应えて信念をもって生き抜く、これこそ愛^{あかし}の証、殉教なのです。



高槻教会（大阪）＜信仰は捨てません。高槻の領民をキリシタンにしたのは自分の一番大きな手柄だと信じています＞（秀吉への返答）

右近の死後書かれたレデマスの追悼文に、その生涯をまとめる一文に出会う。「右近は賢明な思慮と不退転の態度の人であったから、自分の意見や態度を軽々しく変えるようなことはしなかった。

彼が日々刻々と殉教の栄冠を期待していたのには理由があり、このことを世の何ものにも変えることはしなかった。」

× モ

2 右近の信仰は時とともに成熟した

右近は戦国時代という難しい時代にあって、受洗後も多くの試練に遭遇しました。和田惟長事件（1573年）、荒木村重事件（1578年）に始まり、秀吉の伴天連追放令、江戸幕府の禁教令によって流されたマニラの地で主のもとに召されるまでの生涯は、まさに試練の連続でした。それら一つ一つの試練を乗り越えるごとに、右近の信仰は成熟していきました。試練は大きな決断を要求します。これを繰り返すうちに、確固とした信念が右近のうちに形作られていったのです。

また、右近が信仰を深める 1570年代から 90年代にかけては、ちょうど日本の教会は「教会の教え」（カテケーシス）を浸透させることに力を注いだ時代でした。右近の信仰の深まりは、教会が教理指導を深めることと密接にかかわっていった努力の一つの実りでした。

私たちは、現代社会の機構や風潮の中で自分を見失いがちです。人生には挫折や失敗は付きものです。そのようなときこそ、信仰を深める良い契機に恵まれるのです。大切なことは、失敗や挫折のときにこそ、福音という原点に戻って、自分を見つめ直すことです。

教会は人々にキリストの教えの真髄をしっかりと伝える努力をしなければなりません。それを通して人生の危機をいかに乗り越えるかを伝えることができるからです。人生の荒波を乗り越え、大きな決断を繰り返すうちに信仰は成熟していきます。信仰者として、私たちは神の目で物事を見、神のことばによって判断し、決断するこ

とが求められています。その決断の基準となる福音をしっかりと語る教会である必要があります。



日本の初期教会の教理は、三位一体、創造、原罪、キリストの受肉、受難、復活、昇天、審判、永遠の生命、十戒だった。1570年～80年代に入り、イエスとその人格、また受難と十字架を通して浮き彫りにするキリスト中心の信仰教育へと移行する。その中で右近の信仰はキリストとの人格的出会いを深めていく。

『どぢりな きりしたん』扉(1600年刊) 勉誠出版
＜人々は長年の間キリシタンの掟と言え、ドン・ユストの掟だと言っていた＞(イエズス会報告書)

× モ

3 右近は教会の良心であった

キリシタン時代の教会の指導者たちは、外国から日本に来た宣教師たちが大半を占めていました。それだけに彼らは、日本の社会、文化、政治の状況を的確に理解しようと努めました。しかし、言語や文化の違い、個人の能力、時代的制約などが重なり、必ずしもそれに成功したとは言えません。

1586年、当時の日本の教会の責任者であった司祭たちが、秀吉の巧みな話術にはまって政治的発言をすることを苦々しく見ていた右近がいました。あるとき、右近は、宣教師が武装した速い船を持っていることを知り、秀吉がどのように反応するかを心配して、それを秀吉に贈るように忠告したと伝えられています。これらはほんの一例です。このように、右近は教会の指導者の近くにいたために、教会の方向性を見極め、かじ取りをする上で大きな役割を担い、いわば教会の良心になったと言えるでしょう。

また、右近の影響の下で育った人々は、日本各地に散ってそれぞれの場所の教会の中心人物となり、日本教会全体を生き生きとした方向に向かわせることに成功したのです。たとえば、188殉教者の中の、右近の家臣であった加賀山隼人（1619年殉教）などは、そうした人物の一人です。

第二バチカン公会議（1962 - 1965）は、聖職者中心の教会から、信徒・修道者と聖職者からなる神の民が作る「交わりの教会」という方向性を指し示しました。その流れに沿って、日本の教会は、「第1回福音宣教推進全国会議（NICE-1）」（1987年）を開催しました。

これを契機に、私たちは「社会に開かれた教会」、「協力して宣教を目指す教会」に向けて歩んでいます。

現在、日本の教会には、教会のあるべき姿を司祭とともに探り、司祭とともに実践する信徒が求められています。多様な価値観が同居する混沌とした時代にあって、教会は、聖職者とともに働き、社会の良心となる信徒を求めているのです。その育成をどうするか、これは現代の教会の急務です。



「右近は愛と尊敬と勇気をもって神父たちが賢明の徳の道を誤らぬよう意見した。彼の追放の人生は当時の教会責任者の無分別な言動に端を発する。追放後も彼は神父たちと連絡を保ちこれ以上教会に危害が及ばぬように、賢明な忠告をもってそれ以上の失策を防止し、救えるかぎりのものを救おうとした。」(ラウレス)

トードス・オス・サントス教会跡(現・春徳寺/長崎) <彼が身につけていた慣わしにより、祈るために落ち着いて、心を集中させていた> (ジョアン・ロドリゲス)

メモ

4 右近は日本文化を大切にし、キリスト教をいかに日本の土壌で開花させるかに努めた

右近は、千利休（1522 - 1591）の七人の高弟（七哲）の一人であり、千利休を含め、彼の多くの弟子たちにキリストを伝え、何人もの人をキリスト教に導きました。当時の宣教師の一人（ロドリゲス）は、右近の茶室は祈りの間であり、茶を饗し^{きょう}つつ友と人生を語り、信仰を語ったと述べています。右近は、茶の湯、さらに書道、絵画、詩歌と多才な能力を発揮し、日本文化とキリスト教を融合させるべく努め、それに成功しました。それは、右近が福音の真髓をしっかりと理解し、それを自分のことばで語る事ができたからです。

右近の時代から 400 年を経た今もなお、西洋のキリスト教という烙印^{らく}を押されているのが日本の教会の現状です。キリスト教関係の書籍も、日本の社会になじまない内容や説明、表現が多く、日本人の心の琴線に触れることばになっていないというのが偽りのないところです。

さらに国際化の進む現代、異文化圏から訪れた多くの人々が、日本の教会でともに生きようとしています。このことも含めて、日本の教会のあり方が今強く問われています。いかなる文化にも適応できるのがキリスト教です。そのためには福音の真髓をしっかりと理解するキリスト者であることが、まず必要です。どのようにすれば現代日本の社会、文化に根づくキリスト教となれるのか、右近の列福運動は日本の教会に問いかけています。



「茶道を無視して右近の精神を理解することはできない。それは武士としてだけでなく、キリスト者としてもそうである。彼にとって茶道は真の意味で『道』であり、しかも神への道であった。そこにおいてこそ、右近の場合、キリスト教の土着が美しく現れてきたのである。」
(F. チースリク)

千利休茶室「待庵」©新潮社 芸術新潮

<この道に身を投じて真実を貫く者には、数奇が修徳と潜心の大きな助けとなる>(ロドリゲス)

メモ

5 右近は「ごたいせつ」の心を実践した

キリシタン時代、信徒たちは「ごたいせつ」を大事にしました。「ごたいせつ」とは神の愛（カリタス）を意味し、当時の教会はその実践に力を注いでいました。右近は父ダリオとともに「ミゼリコルディアの組」に属しました。これは、貧者や病者など、当時、弱い立場に追いやられた人々の側に立ち、彼らの救済を目的とした信徒の団体です。右近と父ダリオは、当時の高位の武士が決して手ずから行わなかったこと、たとえば死者を葬り、貧者を救済するなど、差別をなくすわざに励んで領民を驚かせました。彼らの生活は模範的であり、それが人々の共感を呼んで宣教につながりました。右近は人を治める者でありながら、「人はみな平等」という福音の視点に立つ治世を実施しました。右近の信仰は実践的であり、とくに貧しい人々を慈しむ心は為政者の基本と心得ていました。人の上に立つ者として、慈しむ心、「ごたいせつにする心」を何よりも大事にしたからです。

現代こそ、キリストの福音の精神に基づいた権威の実践が求められます。人の上に立つとは、他人を思いやり、人のために尽くす奉仕職です。組織の上に立つ人々は、政治家や企業の責任者においても、武将として福音の精神によって統治に当たった右近に学ぶべきではないでしょうか。同時に、一人ひとりを大切にする政治倫理、企業倫理を確立するための努力も惜しんではなりません。「ごたいせつ」の心をもって実践的に人々を助け、弱者を抑圧する強大な力

に挑む人材が輩出することを、現代社会は切に求めているのです。



ミゼリコルディア本部跡 (長崎) <万事にこえて、
デウスを御大切に思い奉る事と、わが身を思ふ
ごとく、ポロシモ (隣人) を大切に思ふ事>
(どちな きりしたん)

「彼ら (父・ダリヨ高山飛驒守
と子・ユスト右近) は、貧しい
人々を訪問し、(重病人への)
告解や死者の埋葬について神
父たちと連絡し、地方から来
る旅人に宿を世話するなど
といった役目をもっていた。ま
ず彼自身が先立ってこれを実
行し、その良き模範をもって人々
に教えた。」

(フロイス『日本史』第103章)

× モ

6 右近の靈性の特徴は「誠実と賢明」である

右近の靈性の最大の特徴は誠実さと賢明さであり、彼に調和のとれた教会感覚をもたらしました。戦国という時代にあつて、右近には決して人を裏切らないという定評がありました。右近は信頼できない武将であると訴え出た者を、秀吉はしかりつけたというエピソードも残っています。彼の誠実さはだれもが認めていたと言えます。彼の誠実な人柄は、多くの人々の信頼を勝ち取りました。その人柄に引かれて、たくさんの武将が教会の門をくぐりました。彼は憶病であったと後世の一史家が述べている例もありますが、それは彼が賢明に物事を判断したことの証でもあります。その賢明さはいろいろな機会に顕現しています。不賢明に政治に介入しようとした宣教師をいさめたのは右近でした。調和のとれた教会感覚とは、極端に保守的になったり、極端に進歩的になったりすることなく、教会のあるべき姿を保ち続けることを身に付けている状態を指します。

調和のとれた教会感覚は、確固とした信仰の原理と基礎があるところに生まれます。人生の座標軸がぶれないからです。それはキリストに基準を置くところから始まります。また調和のとれた教会感覚は、誠実さと賢明さという二つの特徴を兼ね備えるものです。使徒からの伝承を正しく受け継ぎ、教会の教えの正統性を大事にする誠実さと、必要とあれば大胆に、しかも正しい方向に適應し、刷新していく勇氣ある賢明さの両方が必要なのです。日本の教会は現在刷新を急いでいます。そのために現代の教会に今何が必要であるの

かを、右近の靈性は示してくれます。



事をひかえ、右近はキリシタン家臣と共に祈りの時間を定め祈っていた。彼は側近や大名の常識よりも教会の感覚(Sensus Ecclesiae)により、調和をもって事にあたろうとした。彼の「信仰は、小我より大きな我へ、自己より社会へ、自己犠牲による社会正義の実現へと開眼させていった」。(海老沢有道)

高山右近像(舟越保武 作)日本二十六聖人記念館所蔵
<右近殿は余りに徳高く潔い生活にて、他の者の模範しえない人物である>(羽柴秀吉)

× モ

7 右近が行く先々に教会共同体が生まれた

右近の追放はかえって教会の発展へとつながりました。明石、金沢と右近が移り住む先々の土地に教会が立ち、発展していきました。また、その土地で育った信者が、中津、小倉、熊本、大分、会津などに次々と教会を立て、信仰共同体を作りました。その意味で、右近の数度にわたる追放は、実に摂理的であったと言えるでしょう。こうした人々の中から、各地に広がる教会の指導者が育ち、多くの殉教者が生まれました。小西行長、内藤如安、黒田如水、熊谷豊前こにしゆきなが ないとうじょあん くろ だじょすい くまがいぶぜんのかみ がもうじさと守、蒲生氏郷、加賀山隼人とその家族などが挙げられます。右近が信仰を強く勧めて信者にしたという意見がありますが、時代の制約を考慮した上で、当時の為政者としては非常に賢明な方法をとって、個人の自由を尊重していることが目に付きます。

教会共同体こそ人材養成の最大のも場であり、その場を体験した者の中から、将来の教会を支える人が生まれます。現在、日本の教会はさまざまな試みを通して共同体作りに取り組んでいます。この取り組みこそが、宣教の最優先課題と考えているからです。閉鎖的でなく、個人のわざでなく、協力して宣教する態勢を作ることが日本の教会の急務です。これと並行して、共同体を方向づける指導者の養成も急がれます。



「神父がそこ(金沢)へ行ってみると、ユストの費用で建てた聖堂があった。ユストはその一家と共に、キリスト信者らしい生活をしていたので、人々は彼の善徳を高く評価していた。僅かな日時の間、百二十余人の武士に洗礼を授け、その中の十二、三人は肥前殿(前田利長)の重臣である。」(パジオ神父の書簡)

金沢教会前の高山右近像(竹下慶一 作)

<人々がこれほどの名誉を与えくださるにふさわしいことを私がしたのでしょうか>(モレホンの記録)

× モ

8 右近は家庭の絆^{きずな}を信仰に置いた

「彼の遺書は老トビアのそれのように孫に対する忠告であった。なかならず、感動的な訓戒をもって、模範的なキリシタンであれ、そしてパードレに従うべしと勧めてあった。そして彼らの中の一人でもこの点において違反することあらば、もはや孫と認めない、とあった。」(モレホン神父の証言から)

孫たちに残した右近の遺言には、何よりも肝心なのは信仰を大切にする家庭を築くことだとの信念が表れています。また、それが守りきれなくなる事態が起こることを予測しての右近の切々たる思いでもあったのです。実際、高槻城にあったときも、明石から追放されたときも、右近は、家族とともにという原則を貫きました。同様に金沢からマニラに追放されたときにも、家族全員でという線を崩すことはありませんでした。それは、家族の絆をつくるのは信仰だとの確固たる信念があったからです。

キリスト者の家庭であっても、親が自分の子供に信仰を伝え切れない現状に対して、右近の生き方は、家族の絆、家族に息づく靈性の大切さを伝えています。家族の絆を信仰という土台に置き、毎日の生活の中で祈る習慣、親子ともに示す隣人愛、そして何よりも奉仕する心を伝える教育、右近は、これらの点を再認識するよう私たちに問いかけています。



「私は、妻、娘、孫たちについては少しも心配していません。彼らも私も、キリストのために追放されてここへ来ました。彼らの愛と、ここまで私について来てくれたことを私は重んじています。これから先、主が彼らにとって、真の父親となると信頼していますので、何ら心配はしません。」（モレホンの記録）

マニラの高山右近像
<いま南坊(右近)は、彼の生涯のすべての行いに捺印を押した> (細川忠興)

× モ

あ と が き

徳川家康は政権を確立するに当たり、豊臣側がキリシタンの勢力と手を結ぶことを恐れ、はや引退同然でありながらも、キリシタンの頭目とみなされていた高山右近をまず処分することを考えたのでした。処分の決定に至るまで紆余曲折を経たものの、結局右近とその家族を海外に追放することに落ち着きました。追放先であるマニラに到着した右近一行は、フィリピンの総督とマニラの市民の熱烈な歓迎を受けました。彼らは右近を殉教者、聖人と考えていたからでした。右近がマニラで過ごした短い最後の日々は、信仰を自由に生きる幸せな時でした。

アジアの国々に戦争の傷跡を多く残したのが、現代の日本の歴史です。右近を温かく受け入れたフィリピンの国も戦場となり、多くの人命が失われ国土が荒らされました。当時のカトリック教会は、戦争協力に巻き込まれ、結果的に日本がフィリピンも含め、アジアの国々に多大の損害を与えたことについて責任を負うものです。右近の列聖運動は、これらの国々に謙虚に謝罪し、アジアの教会とのより良き関係を強化する契機を提供しています。

福者ペトロ岐部司祭と 187 殉教者同様、高山右近は、世界にも類を見ない独特の生涯を歩み、神への愛の証を示しました。神が日本の教会に現わされた救いのわざを、彼の生涯に見ることができます。私たちは、それをしっかりと受け止め、未来に向かって力強く進むための糧にしていくことを願わずにはられません。

2012年2月3日 神のしもべユスト高山右近の命日
日本カトリック司教協議会 列聖列福特別委員会

ユスト高山右近の列福を求め祈り

すべての人の救いを望まれる神よ、

ユスト高山右近は、「全世界に行つて、福音をのべ伝えなさい」というキリストのことばにこたえ、苦しむ人を支え、困難のうちにある人を助け、あなたへの愛をあかししました。また、世の権力に屈することなく福音に忠実に従う道を選び、すべての地位と名誉を捨て、幾多の困難をすすんで受け入れ、ついには異国へ追放されました。このように、あなたはユスト高山右近をとおして、すべての人に仕える者の姿を示してくださいました。

父である神よ、どうかわたしたちの祈りを聞き入れ、福音を力強くあかししたこの神のしもべを福者の列に加えてください。

わたしたちの主イエス・キリストによつて。アーメン。

(各自の意向を沈黙のうちに祈る)

父である神よ、現代に生きるわたしたちが、あなたの忠実なしもべユスト高山右近にならつて、この世の力や誘惑に惑わされることなく生き、み名を知らない人びとに福音をあかしできるように、ゆるぎない信仰と勇気で満たしてください。

わたしたちの主イエス・キリストによつて。アーメン。

事前に当協議会事務局に連絡することを条件に、通常の印刷物を読めない、視覚障害者その他の人のために、録音または拡大による複製を許諾する。ただし、営利を目的とするものは除く。なお点字による複製は著作権法第37条第1項により、いっさい自由である。

現代にひびく右近の靈性

2012年2月3日発行 ©カトリック中央協議会 2012年

編 集 日本カトリック司教協議会 列聖列福特別委員会
発 行 カトリック中央協議会
 〒135-8585 東京都江東区潮見2-10-10 日本カトリック会館
 電話 03-5632-4445
印 刷 有限会社 プリティック・ウィード

この冊子の一部または全部の無断転載を禁じます。

非 売 品

